

祖父の生活から学んだこと

裾野市内中学校

目黒さん

祖父の家に行くと、机上にはチラシで折られた箱形のゴミ入れがある。昔はあまり気にしていなかったが環境問題についていろいろと見聞きするうちにこの手作りゴミ箱はエコだと思っようになった。材料はチラシだけ。立ち上がることがおっくうになってきた祖父はゴミ箱まで行かなくても済むように机の上の簡易ゴミ入れに捨てることを思いついたようだ。『チラシごみ入れ』はとても便利で祖父はよく折っておいてくれるため、私の家に持ち帰りキッチンや食卓に置き、利用している。一人暮らしの祖父がどこで折り方を覚えたのか気になったため聞いてみると、高齢者が集まる集会で教わったと言う。私も祖父に習うことにした。口数の少ない祖父だが、その時に聞いた言葉が忘れられない。

「ただで捨てるのはもったいない。」

私は小学生の頃よく家の近くにある「エコット」という施設に行っていた。その施設はエコや環境問題についてクイズや体験を通して学べる場所だ。そこには環境問題について考える際よく目にする、海に

プラスチックが大量に捨てられてビニール袋やペットボトルが浜辺に山積している、心痛む写真があった。

そこで私は二つ解決策を考えた。一つめは祖父の手作りチラシゴミ入れからヒントを得た。何といってもこのゴミ入れの良さは古くなる、燃えるごみとして中のゴミと一緒に捨てられることだ。このことから私は新聞紙で丈夫な買い物袋を作れば良いのではないかと声を上げた。最近このスーパーもレジ袋が有料化していて、マイバッグ持参が推奨されている。以前よりは使っている人を見かけるようになったものの残念ながらまだまだだと感じる。特に男性は必ずといっていいほどレジ袋を買っている姿を目にする。一方でコロナウイルス感染者が増えているアメリカでは、マイバッグ禁止というニュースを見た。洗わないから不衛生なのだ。マイバッグは様々な場所におく。カートのセットし買い物をし、車の中では足元に置くこともある。店内の床に置くこともあるかもしれない。途中で立ち寄った先で空いた席にも置くこともあるだろう。そして最終的には家の床やテーブルなどに置かれるのだ。洗にくい素材で出来ている、もしくは洗う習慣の無いマイバッグにウイルスが付着していたら脅威となりうる。そこで私が提案したいのは、エコで一回限りの使用となる新聞紙で出来たマイバッグだ。これならば使い終わった後、燃えるゴミとして捨てら

れる。学校のクリスマスチャリティセールで販売されていた新聞紙バッグは海外の新聞を使用し、丈夫でもあり思わずお金を払いたくなる程だった。新聞紙ならばつなぎ合わせることで様々な大きさのバッグが作れるだろう。もちろんウイルスに敏感になる必要が無い時期にはマイバッグの活用も一つの選択肢だと言える。これに関しては洗濯して使うという認識も広がればなお良い。

二つ目はペットボトルの問題だ。紙コップに飲み物が注がれる自動販売機からヒントを得た。専用の水筒のフタを外し機械に入れたら飲み物が注がれる自動販売機はどうだろうか。ペットボトルの容器代を削減することもでき環境にもお財布にも優しいシステムとなるだろう。

以前、目の錯覚を利用し花壇の絵を立体的に見せる仕かけにする事で迷惑駐車を削減したというニュースが話題になっていた。人間の良心に訴えかけるような素晴らしいアイデアではないだろうか。コンビニのトイレなどで見かける「いつもきれいに使って頂きありがとうございます」という言葉には綺麗に使おうという意識を自然に生み出す効果があるのかもしれない。

以上のことからレジ付近に、または自動販売機付近に良心に訴えかけるゴミまみれの海の写真などを貼れば一人でも多くの人が綺麗な海を目指し行動を改めるかもしれない。またトイレのように「いつもマ

イバッグを持参して下さりありがとうございます」という言葉を添えるだけでも視覚に訴える効果があるのではないだろうか。

「ただで捨てるのはもったいない」―祖父の言葉がよみがえる。祖父はなかなか物を捨てない。とっておきの革靴は二十年以上も手入れをし必要な時に履いている。戦時中の物のない時代に育っているから、そのありがたみが骨身にしみているのだろう。私はまだ使える物を捨て、新しい物を買っていないだろうか。ペットボトル、レジ袋問題に関しては解決するために私たちの価値観や行動一つひとつが問われてくる。祖父のように質素に生活することは物で溢れている現代を生きている私たちにとって難しいことなのかもしれない。しかし物を大切にする心、環境に対する姿勢を改めることはどの時代においても可能な事だといえる。だからこそ、私は自分の生活を見つめ直すことが重要だと肝に銘じたい。